

## ヨーロッパとは何かーアイデンティティ形成の過程ー

—Europe in History: the making of European Identity—

森 貴子（西洋史）

### 1. 講義の概要

2016年度後期・金曜日3限開講の外国史Ⅱ（人間社会デザインコースでは、ヨーロッパ形成史）は、三回生以上を対象に、上記タイトルで開講された。学期末試験受験者数は15名（社会科教育2名、教育学1名、教職大学院・教育実践開発コース1名、人間社会デザインコース11名）であった。

#### (1) 講義の目的

本講義は、ヨーロッパやネイションといった集団が、そのアイデンティティも含めて歴史的に構築されたものであるとの認識に至ることを目標としている。

この目標を達成するために、「ヨーロッパとは何か」という問いを設定した。その空間としてのまとまりは如何にして形成され、また如何なる歴史的性格を持つのか。本講義では、こうしたヨーロッパ意識の形成過程を、いくつかの具体的事例を取り上げつつ長期的視点から検討した。そしてそこからは、地域的アイデンティティの複層性や変容、アイデンティティ形成における歴史の役割、そして「他者」の重要性などが明らかになった。

こうした認識を得ることは、ひいては、近代国民国家の成立以来我々を強烈に縛り付けてきた「ネイション」の相対化に繋がると同時に、紛争をはじめとした現代世界の諸問題を考える際の、糸口になると考えている。

#### (2) 講義の詳細

授業は、基本的に、講義形式で行われた。まずはなぜ、トルコはEUに入れないのか、その場合の「ヨーロッパ」とは何なのか、などの問いかけをしたうえで、①古代ギリシアにおける異文化受容と近代ヨーロッパにおけるその否定(古代ギリシアの理想化)、②中世におけるヨーロッパ意識の勃興とその内容、③ヨーロッパ各地域におけるゲルマン的要素とローマ的要素の併存、④キリスト教(カトリッ

ク)＝ヨーロッパの形成におけるギリシア正教の役割、⑤「他者」としてのビザンツ帝国、オスマン＝トルコ、⑥地域紙幣（イングランド銀行発行紙幣に対するスコットランドとアイルランドの立場）とアイデンティティ、といった内容を扱った。

資料に関しては、各回の内容に沿った史資料を可能な限り準備して、学生による理解を手助けすると同時に、ビデオなどの映像資料も利用した。

### 2. 授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした（2017年2月3日実施）。アンケート回答者は学期末試験受験者の人数・所属と一致している。

問1～6は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

<評価基準>

5：強くそう思う（非常に良い）

4：ややそう思う（良い）

3：どちらとも言えない（普通）

2：あまりそう思わない（あまり良くない）

1：全くそう思わない（良くない）

<問い>

問1：この授業への出席状況は

問2：授業のテーマ・目的は、明確でしたか

問3：担当教員の説明は分かりやすかったですか

問4：配付資料・映像資料は有用でしたか

問5：授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか

問6：授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	4	3	2	6	0
問2	8	5	2	0	0

問3	6	6	3	0	0
問4	9	4	2	0	0
問5	4	4	6	1	0
問6	7	4	4	0	0

\*問1～6に対するコメント

問3： 分りやすいが、板書が多く説明を聞きそびれることが多々あった

問5： 世界史の基礎知識があまりないので、理解に時間がかかる場所があった

問6： アイデンティティと国家の形成プロセス

◎ 問7～9は記述式で解答を求めた。以下、紙幅の制約上、内容を整理して取り上げる。

問7 この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

資料の選択がよかった。聞いたことはあるが、知らなかったことを学べてよかった／高校世界史を受講していなかったため、勉強になった／大英博物館のビデオを視聴したことで、授業に対する関心が増した／資料がカラーで見やすい／説明が分りやすく、興味を引く話し方だった／内包していたはずの文化が、削がれたり、また含まれたりする所／ヨーロッパについて詳しく学べた／オスマン・トルコの話が興味深かった／各国のアイデンティティについて考え直すことができた／ポンペイの壁画に関するビデオが新鮮だった

問8 この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

板書の量が多い／板書が早い／ノートを取る時間より、もっと考える時間が欲しい／教員の説明を多くして欲しい／ヨーロッパのアイデンティティの話と、イギリス国内の話（事情）が少し切り離されているように感じた

問9 この授業を受講して、我々の生活している地域社会（日本や四国、松山）とアイデンティティとの関係について、考えたり調べたりしましたか。

はい／特にしていない／経済との関わり、国際情勢／考えるきっかけになった／BBC ニュースの内容等が以前より頭に入りやすくなったし、国内や大学近辺での話にも関連する点が多いな、と感じられるようになった／先週フィリピンに行ってきたので、日本のアイ

デンティティをいつもより感じた

### 3. コメント-授業の達成度・今後の課題-

日ごろ、我々が自明のものとして取り上げることのない「ヨーロッパとは何か」という問いに対して、場所や時代を変えながら、印象的なトピックを取り上げて考察する本講義は、通史の場合などと比べると、なかなか理解が難しい部分があったようだ（問5に対する回答）。しかしそれでも、問6でのコメントや問7の回答からは、受講生が、ヨーロッパ・アイデンティティの形成と歴史（観）について、一定の認識を得たと解釈できそうだ。映像資料や配布資料についても、関心や理解を深めるための補助として機能したことが分り、今後ともこの方向での努力を続けていきたい。

ただし、板書の量や早さについては改善点として指摘されており、より丁寧な説明と時間的余裕も含めて、今後の課題としたい。

### 4. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

「ヨーロッパ」や「イギリス」、「ドイツ」など特定「地域」を対象とした本講義は、その最終的な目標を、自分自身のアイデンティティを問い直す姿勢の育成に置いている。そのためにはもっと受講生との対話に時間をかけて、現代社会に生きる我々日本人について、またさまざまなレベルでの「地域問題」について、ディスカッションしていくことが必要となろう。今回、アンケートで問9としてこの問題を取り上げてみた（さらに期末試験でも、アイデンティティに関して自らの見解を論述させる問いを設けている）が、やはり講義の内容を自らの生活や日本社会に引きつけて能動的に考察するという態度は弱い。アンケート結果から、一部の学生がそうした意識を持ち始めている様子もうかがえるが、例えば教員志望の学生が歴史や現代社会の教科書を読み込む際に、地域的アイデンティティの複層性や変容、アイデンティティ形成における歴史の役割といった視点を採用できるかどうか。学んだことと自分の周りの世界とを繋げて理解できる思考様式・態度を育成するためには、講義内容の精選をはじめとして、より自覚的な取り組みが必要である。